

日本語におけるアクセントの在りかについて

尾 形 佳 助

1. アクセントとは何か

たとえば英語の 'desert' (砂漠) と 'dessert' (デザート) では、どこを強く発音するかというその位置がちがう。前者は語頭を強く発音するのに対して、後者は語末に強めが来る。こういう、単語のどこかにこの種の^{しるし}印を付けたくなるような状況があるときに、その印のことを筆者はもっとも抽象的な意味での「アクセント」と称している（アクセントの定義については例えば早田1991など参照）。印の在りかを云々する際に必要となる言葉の単位は、英語の場合はもちろん^{シラブル}音節がそれとなる。

2. 日本語にもアクセントはあるか

翻って日本語の場合はどうか。日本語にもアクセントがある。そういう表現が定義上妥当かどうかは、ひとえに日本語にも単語のどこかに印を付けたくなる状況があるかどうかにかかっている。はたして事実はどうかという、そういう事情が日本語にもたしかにある。標準日本語のケースから一例をあげれば、同じ「ハシ」でも「箸」と「橋」と「端」ではアクセントの在りかがちがう。「箸」は「ハシ」である。「橋」と「端」は、単独だとどちらも同じ「ハシ」で区別がつかないが、助詞が付くと、前者は「ハシガ」となり、後者は「ハシガ」となる。三者のちがいは、とりあえずは音調の型のちがいだが、より本質的には印の位置のちがいである。最

初の「ハ^シ」は、「ハ」から「シ」にかけて^{ピッチ}音程が下降する型だから/ハ^シ/と解釈される。二つ目の「ハ^シガ」は「シ」から助詞にかけてピッチが下降する型ということで/ハ^シガ/となる。ピッチの下降の起こらない「ハ^シガ」は従ってアクセントのない型、すなわち無印の/ハ^シガ/と考えるほかはない。「橋」や「端」で語頭が低くなるのは文節の始まりの合図のようなものと考えられる。

このように、日本語にも単語のどこかに印を付けたくなる状況がたしかにある。英語にはない「アクセントのない単語」があるところがおもしろいが、それを除けば、アクセントに関する日英語のちがいは単純明快である。すなわち、アクセントが、英語の場合は音節の上に置かれるのに対して、日本語では音節の^目に置かれる。それだけのことである。それが、片や音節の上に置かれる英語タイプのアクセントだと^{ストレス}強めという形で実現し、片や音節の^目を利用する日本語タイプのアクセントだと、ピッチの下降という形で実現する。アクセントの位置とアクセントの発現形態との間にはそんな相関関係があるのではないか。そう筆者は疑っている。

ちなみに、音節数がたとえば一つ増えて3音節の単語になると、位置の選択肢が一つ増える分、型の数も一つ増えることになる。「蛙」の類の3音節語から「カ^ラス」「タ^マゴ」「コ^トバ(ガ)」「カ^エル(が)」に代表される四つの型が出てくるのはそういうことだ。アクセントのありようはそれぞれ/カ^ラス/、/タ^マゴ/、/コ^トバ/、/カ^エル/のようになる。逆に音節数が一つ減って1音節語になると、出てくる型は「木^ガ」の型と「毛^ガ」の型の2種となる。位置の選択肢のうち語中の可能性がないわけだから、なるほどそれも当然の結果である。それぞれ/木^ガ/、/毛^ガ/と表示されることになる。

わち、モーラ数だと数が合わずとも音節数で考えると期待どおりの数となる。それが素朴な現実である。

(2) a. 1音節2モーラ語

棒 $\overline{\text{ボー}}(\underline{\text{ガ}})$

脳 $\overline{\text{ノー}}(\underline{\text{ガ}})$

b. 2音節3モーラ語

氷 $\overline{\text{コーリ}}(\underline{\text{ガ}})$

道具 $\overline{\text{ドーク}}(\underline{\text{ガ}})$

工具 $\overline{\text{コーグ}}(\underline{\text{ガ}})$

2音節4モーラ語

健康 $\overline{\text{ケンコー}}(\underline{\text{ガ}})$

弁当 $\overline{\text{ベントー}}(\underline{\text{ガ}})$

剣道 $\overline{\text{ケンドー}}(\underline{\text{ガ}})$

以上要するに、日本語にもアクセントはあり、その単位は少なくとも標準日本語の場合は音節である。その点、英語となんら変わりはない。ただ、アクセントが、音節の上ではなく、音節の繋ぎ目にあるのが日本語の日本語らしいところである。音節の繋ぎ目なら、位置の選択肢は、例えば「工具」なら「コー」と「グ」の間や「グ」のあとなどがそれとなる。「ドーク(ガ)」が/ドーク'/としか考えられない以上、「コーグ」は/コー'グ/であろう。/コー'グ/がなぜ「コー'グ」とはならず「コー'グ」となるかは論点だが、アクセントの前に長い音節が控えていれば、下降がワンテンポ早まるといったことが起こるのであろう。「ノー'」「ベントー'」「ケンドー」についても当面同様に理解しておこう。そのへんの事情、上記(2)に対応する次の一覧表で確認されたい。

(3) a. 1音節語

ボー

ノー'

b. 2音節語

コーリ

ドーク'

コー'グ

ケンコー

ベントー'

ケン'ドー

4. 東京アクセントと関西アクセントのちがい

強^{ストレス}めという形で実現するか、それとも下降、あるいは高から低への変動という形で実現するかのちがいはある。しかし、それは、アクセントが音節の上に置かれるか、音節の繋ぎ目に置かれるかというちがいの結果である。単語のどこかにアクセントをふる言語であるという点では、英語も日本語も本質的な差異はない。そう筆者は考える。

英語という異言語と比較してさえそうであるのなら、同じ日本語の方言どうしなら、なおさらそうなのか。もちろん、大筋としてはそうだと筆者は考える。この点、日本語のもう一つの代表格である関西方言の例で考えてみよう。その音相を思い浮かべると、比較的保守的な関西弁の一例である神戸の例でいえば、「油」は「アブラ」であり、「薬」は「クスリ」であり、「言葉」は「コトバ」である。単語の音相に下降調というパターンが通底していることは明らかだ。下降調が現れているということは、アクセントが音節の繋ぎ目にふられているということにほかならない。すなわち、アクセントを使うという点のもとより、アクセントが音節の繋ぎ目にあるらしいという点でも、関西弁と東京弁に本質的な差異はないものと察せられる。

もちろんすべてが同じというわけではない。両者には思いのほか大きなちがいもある。どちらがうかはすでに尾形（2005）などで論じたので、詳しくはそちらを参照されたいが、結論だけ言えば、両者のちがいは概略以下のようにまとめられる。

一つには、アクセントをふる位置の使い方とアクセントの発現形態である下降^{HL}音調がどこに現れるかという点で、両方言には大きな差異があるらしい。東京方言だと、位置の使い方は/カ'ラス、タマ'ゴ、コトバ'/のよ

うなものであった。これが、高と低がアクセントの左右両隣に発現して、それぞれ「カ^Hラ^Lス、タマ^Hゴ^L、コトバ^H(ガ^L)」のようになるというのが東京方言のパターンである。

(4) アクセントの位置	カ'ラス	タマ'ゴ	コトバ'
アクセントの発現	カ ^H ラ ^L ス	タマ ^H ゴ ^L	コトバ ^H (ガ ^L)

これに対して関西方言では、アクセントをふる位置として、いきなり文字どおりの語頭位から使い始めるものらしい。具体的には、関西の「アブラ」は/'アブラ/というアクセント形から「'アブラ」というピッチのふられ方をして出てきているものらしい。アクセントがこういう位置にあると、下降音調がアクセントの右隣に現れるのはいわば必然だ。連動して、アクセントが次頭位にあれば/ク'スリ/のようになり、その次であれば、助詞なしだと/オショ'ユ/（お醤油）のように語末にやや窮屈な下降調が現れることになる。関西弁では「毛」の類の1音節語が「ケ」のごとく長くなるのが通例だが、この現象も、元をたどれば1音節上に高と低が窮屈に被さることに起因するものと考えられる。すなわち、/'毛/の類の語頭にアクセントのある1音節語が「'毛」のようになるということが引き金となって、それにつられるように他の1音節語も一律に長くなるというわけだ。

なお、アクセントの前に「ク'スリ」や「オサ'ユ」のごとき音調の空白状態が発生したとき、それを解消すべく義務的にあてがわれる低音調、それが一般の関西音調論で言うところのいわゆる「低起式」なる音調の正体だと筆者は見る。

この点、低起は低起でも、東京方言の「タマゴ」などに見る低起とはその性質がまったく異なる。東京の「タマゴ」は/タマ'ゴ/だが、語頭音節

の低音調は丸暗記する必要のない情報であるのみならず、単語の音形として常に低くなければならないといったものでもない。その証拠に、単独だと文節の始まりを告げる合図として「タマ'ゴ」のように低く始まるが、「コノタマ'ゴ」のように連体詞が前接すると、そこがそのまま高くなる。これに対して、必ず低でなければならないのが関西音調論で言うところの低起式の低である。関西の/ク'スリ/や/オショ'ユ/では、下降音調がアクセントの右隣に発現するという特性のゆえ、アクセントの左隣には否が応でも音調の空席状態が発生する。その空席を義務的に補完する音調、それがいわゆる低起式の本質だと、そう考えるわけである。

(5)	ク'スリ	オショ'ユ	始発状態
	ク ^H 'スリ ^L	オショ ^{HL} 'ユ	アクセントの発現
	ク ^L 'スリ ^H	オショ ^L 'ユ ^{HL}	音調の空白部への低音調付与

ところで、下降音調がアクセントの右隣に現れるのが関西弁の特徴なら、アクセントが語末にある場合はどうなるのか。そういう場合だと、アクセントの右隣にはいわば何もないわけだから、下降音調のあてがいようがないではないか。そういう場合は、下降音調の発現する向きが、アクセントの右翼からアクセントの左翼へと反転する。そういうことが関西弁では起こると筆者は考える。具体的には神戸の「コトバ」はその種の単語の1例である。これを筆者は/コトバ'/と見る。こういう表示状態だと、なるほどアクセントの右隣には何もない。だから、そういう場合には/コトバ'^H^L/のごとく、下降音調がアクセントの左翼へと反転付与される。そういうことが起こると考えるわけである。なお、語頭の「コ」の部分の空白にはHがそのまま延長してそこを補完するものと考えられる。/'アブラ/^H^Lの「ラ」の部分の空白にはLが延長するのであるから、それと逆向きの現象が起こ

ったとしても別段不思議はないであろう。そのへんの事情を一覧表にして示せば、次のようになる（なお、本稿の主たる話題は「アクセントの在りか」である。「アクセントのない単語」については今回論述を省略する）。

(6) コトバ'	'アブラ	始発状態
^H ^L	^H ^L	アクセントの発現
コトバ'	'アブラ	
^H ^H ^L	^H ^L ^L	音調の空白部への音調の延長
コトバ'	'アブラ	

5. 音節かモーラか：関西アクセントのもう一つの特徴

/'アブラ/という、文字どおりの語頭位をアクセントをふる位置の選択肢の一つとし、また、アクセントの発現形態である下降音調がアクセントの右翼に展開する。そこに関西アクセントの最大の特徴がある。ただし、アクセントが語末にあれば、下降音調は左翼に反転付与される。京阪神の典型的な関西弁はもとより、近畿の諸方言では、語末まで高が維持され助詞のところではじめてピッチが落ちる型というのが事実上見当たらないようだが、これは、語末にアクセントのある単語がないからではない。/コトバ'/のごとく語末アクセント型の単語は現にある。ただ、そういう場合には下降音調のかぶさり先がアクセントの左翼へと反転する。語末アクセント型が語末音節の低という形をとるのはそういうわけである。

アクセントをふる位置として文字どおりの語頭位を使うというだけではない。それ以外にも関西方言には、ある重要な特徴がある。すなわち、この方言ではアクセントが、音節の繋ぎ目はもとよりモーラの繋ぎ目にも置かれうるらしいというのがそれだ。

象徴的な1例をあげれば、たとえば「玄関」は神戸では「ゲンカン」である。アクセントの右隣に下降音調が発現するというのが本論が考えると

ころの関西アクセントの基本である。それなら「ゲンカン」なら/ゲンカン/であろう。「ゲン」が「ゲ」と「ン」とに切れるとすれば、その単位は音節ではない。モーラである。アクセントがモーラの繋ぎ目にもある。とりあえずはそうとしか言いようのない現実が、この種の音調を見るかぎりはあるわけである。類例としては、たとえば「センシュー」（先週）、「コンジョー」（根性）がそれぞれ/センシュー/、/コンジョー/と解釈される。

もちろんこの現象、音節末位に撥音「ン」をもつ単語にかぎった現象ではない。「シューキョー」（宗教）や「ジョーケン」（条件）など音節末に長母音の後半部が控えるものや、「ライシュー」（来週）、「タイワン」（台湾）、「タイョー」（太陽）など、そこに1音節と言うのがためられる母音様の音声が来る単語でも話は同様だ。

ちなみに以下、2音節4モーラ語の全体像をざっと概観しておくと、「センセー」（先生）、「ダイコン」（大根）はいずれも語頭にアクセントのある型である。「センセー」なら/センセー/となる。次頭位にアクセントのある型は上述の/ゲンカン/がそれだとして、その次の位置にアクセントがあると解釈できるのが「ギンナン」（銀杏）、「ホンニン」（本人）、「コーヒー」などである。「ギンナン」なら/ギンナン/となる。第1音節の「ギン」が低くなるのは、音調の空白状態を補完するいわゆる低起式の低の現れだ。

次に、次末位、すなわち語末の一つ前の位置にアクセントをもつ単語だが、これに該当する用例は見当たらない。そういえば、単語の長さが3モーラ以上になると、/オショ、ユ/（お醤油）などの稀少例をのぞけば、次末位にアクセントをもつ単語はないらしい。これと軌を一にする現象なのであろう。

語末にアクセントのある単語は、進歩的な関西弁だともう退化してなくなっているかもしれないが、比較的保守的な関西弁でなら、いまなおそれを耳にすることができる。筆者の調べた神戸方言の例では、「ハンブン」(半分)、「マンジュー」(饅頭)、「ジョーダン」(冗談)、「サイナン」(災難)などがそれに該当する。それぞれ/ハンブン'/マンジュー'/ジョーダン'/サイナン'/と解釈される。なお、/マンジュー'/'の再現形なら「マンジュー」(→「マンジュー」)でもよさそうなものだが、そうはならないのは、下降音調が音節単位でワイドに被さっているからだ。すなわち、アクセントの単位と下降音調が被さる単位とは分けて考えなければならぬということだ。

以上、アクセントのない単語を除いて2音節4モーラ語の弁別状況を概観した。一覧表にすれば次のようになる。理解の便宜をはかるため、隣に4音節4モーラの用例もあわせて掲げておこう。

(7) 2音節4モーラ	4音節4モーラ
先生 'センセー	甘酒 'アマザケ (→'アマザケ)
玄関 ゲ'ンカン	紫 ム'ラサキ (→ム'ラサキ)
银杏 ギン'ナン	玉葱 タマ'ネギ (→タマ'ネギ)
半分 ハンブン'	一月 イチガツ' (→イチガツ')

6. むすび

以上、関西方言では、アクセントは音節の繋ぎ目のみならず、^{モーラ}拍の繋ぎ目にもありうるという、そんな見方による関西名詞音調論の1例を提示した。「ゲン」や「シュー」とは1音節、すなわち、発音上はそれ以上分割不能としか言いようのないひとかたまりである。そういうひとかたまり

をなす単位の間にはアクセントがいれば割って入るようなことがほんとうにありうるのだろうか。そんな疑念をぬぐいきれない筆者としては、今回述べたことは、ある種勇気のいる主張でもあるが、「センセー」「ギンナン」の型に加えて「ゲンカン」という型は現にある。この厳然たる事実をまえにして、しかも、関西弁では下降音調はアクセントの右翼（なければ左翼）に発現するという前提を維持するかぎりには、「ゲンカン」は素朴には/ゲンカン/としか解釈のしようがないのもまた現実である。アクセントの在りかは関西弁でももっぱら音節の繋ぎ目であるという主張を決して諦めたわけではないということを断った上で、当面は観念し、アクセントは関西弁ではモーラの繋ぎ目にもありうるということにしておこう。そのほか、今回議論を端折ったことも多々あるが、すべてはまたの機会を期すということになる。

引用文献

- 早田輝洋（1991）「東アジアにおける九州方言」『九州大学公開講座 23 九州のなかの世界』九州大学出版会（『音調のタイポロジー』大修館書店1999所収）
- 尾形佳助（2005）「京阪式動詞音調論再考」『文林』第39号、神戸松蔭女子学院大学。